

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大西 瞳

題 目 学校健康診断結果の活用
ーヘルスリテラシー等関連要因の探究及び促進方策の検討ー

【序論】

健康診断(以下、健診)結果を活用した健康の自己管理(以下、活用)が重要視され、その教育は高校を卒業するまでに行うことが望ましい。学校における定期健康診断(以下、学校健診)や保健教育を通じて教育が行われているが、活用に関する内容は取り扱いが不十分である。高校卒業後に健診結果活用能力が身につけていることを目指して、活用に関する教育は各学校段階の児童生徒の実態に即して計画的に実施する必要がある。

しかしながら、児童生徒の健診結果の理解や活用の状況、健診自体に対する認識、活用を促す要因は明らかにされてこなかった。一方、成人を対象とした調査では、健診結果の理解と活用の直接的な関連性が弱く、保健指導によって向上する介在要因があること、活用に対して健康への関心、ヘルスリテラシー(以下、HL)、結果に対する認識、結果の読解力(以下、読解力)、健診による恩恵及び負担の認識からなる健診・検診受診の意思決定バランス(以下、意思決定バランス)が関連していることが示されている。

そこで、本研究では次の3つの研究結果から、児童生徒の健診結果の理解と活用に介在する要因、健診結果の理解、活用、介在要因、健診自体に対する認識の実態、活用を促す要因を明らかにし、活用を促すための教育と配慮について考察した。

【研究1】

小・中・高校生の健診結果の理解と活用の校種及び性差、理解と活用間に介在する要因を検討した。高い校種ほど理解、リスク・対策の必要性の認識、予防動機は高く、活用は低かった。また、これらの状況は、男子より女子の方が良好であった。理解からリスク・対策の必要性の認識、予防動機を介して活用に至るモデルで良好な適合度を得た。

【研究2】

小・中・高校生の健診自体に対する認識として、スクリーニング知識、健診による恩恵及び負担(以下、恩恵及び負担)の校種及び性差を調べた。高い校種ほどスクリーニング知識、

恩恵、負担は高くなった。負担では、小学生は健診後の不安を、中・高校生は健診時の負担感を認識していた。スクリーニング知識及び恩恵は女子の方が高く、負担は男子の方が高かった。

【研究3】

活用と健康への関心、HL、結果に対する認識、健診結果の読解力(以下、読解力)、意思決定バランスの関連性をHLスキルフレームワークを用いて検証した。高い校種ほど健康への関心、HL、結果に対する認識、読解力、意思決定バランスは高くなり、活用は低くなった。仮説モデルに4つのパスを追加した修正モデルで良好な適合度を得た。健診結果に対する認識から読解力、意思決定バランス、活用の順に影響するパス、健康への関心から読解力、意思決定バランス、活用へのパス及び、HLから活用へのパスは全ての校種において有意であった。健康への関心と結果に対する認識からHL、HLから読解力、意思決定バランスへのパスは中・高校生のみで有意であった。

【考察】

活用及び健診自体に対する認識は校種及び性によって異なることから、活用に関する教育を行う際は、校種及び性差を考慮する必要がある。集団や個人の特性に応じた保健教育や学校健診を実施するためには、指導者が校種及び性によって認識や行動が異なることを理解しておくことが重要である。

また、活用のためには、健診結果を分かりやすくし、読解力と恩恵を高め、負担を軽減させることが有効である可能性がある。分かりやすい結果の通知方法として、正答率が低かったABCDで示される視力検査及び陰性(-)陽性(+)等で結果が示される尿検査では、記号などの意味を結果通知の用紙に明記する必要がある。また、読解力を高めるために、児童生徒自身や架空の人物の健診結果を用いた健診結果の理解、リスクの認識、対策の必要性の認識、予防動機を高める指導が有効である。さらに、意思決定バランスの向上のために、小学生では健診後の不安を軽減する保健教育を、中・高校生では健診時の負担感を軽減する環境整備等²⁰⁾を行うことにより負担の認識の積み上げを減らしつつ、全ての校種において保健教育を通じて恩恵に働きかけることが効果的である。そして、このような教育や配慮を行う際には、対象者の健康への関心とHLの程度に合わせて、メッセージやコミュニケーションの方法を修正することで、より効果がある可能性がある。

各学校段階において、以上のような教育や配慮を行うことは、児童生徒の活用を促すだけでなく、高校卒業後の健診結果を活用した健康の自己管理のためも有益である。今後、活用に関するさらなる研究と実践が望まれる。